

受験終了後の現実との折り合いが気になり

今年みんなはどんな気持ちで入学してくるだろう。新入生を迎える時、いつも考えることである。大学時代、教育社会学の講義で、高校生を受験生にするためにたき付けることを「加熱」、その戦闘モードを解除し、進学先の大学での生活になじんでいくことを「冷却」という、と習った。その時は、数十年後にこれらの場に立ち会うような仕事に就くとは思わなかった。

学生から受験体験を聞いてみると、高校での加熱の機会は、個人面談、数多くの模擬試験の実施、進路講演会の開催などなど、実に多彩であることがわかる。「学祭終了後に受験モードに入っていました」と振り返る学生もいるので、加熱のタイミング取りについても、学校側は抜かりないようだ。要するに高校は、ある時期になると生徒諸君に対し、さまざまな形で「受験生になろう!」と説くのである。

個別に加熱するよりも、まとめて加熱したほうが効率は良いし、それによって生徒同士のたき付け合いも期待できる。また、最後の最後まで奮励を促すことによって、最適な進路の実現を保証できる可能性は高まる。このあたりが、「受験は団体戦」を合い言葉に学年末まで引っ張っていくという、進学校における典型的な進路指導につながっているであろう。

では、それで全ての生徒が希望どおりの進路を実現できるかといえば、もちろんそうではない。大学入試の選抜圧力が弱くなったとはいえ、あと一歩及ばなかったという受験生は、志望をかなえた受験生より多いはずである。アドミッションの仕事に携わっていると、加熱されたものの志望を果たせなかった受験生が、入学した大学でその後どのように折り合いを付けていくのか、大変に気になる。豊富にある加熱の機会に比べると、冷却の機会は決し

大谷 奨

筑波大学アドミッションセンター准教授

① 加熱の季節・冷却の候

曇りのち晴れの アドミッションな日々



潤沢とは言えないからである。

もちろん、「今から考えると、よくあれだけ受験勉強がんばれたよなーと思います」と、見事に冷却を済ませている学生もいる。また、生徒が進学する大学のことを徹底的に調べ上げて、その特徴を伝えて送り出している高校の先生もおられるので、冷却の機会は皆無ではない。しかし、加熱の圧倒的な「物量」に比べると、それはやはり乏しく、その分、自身での冷却を進学後に迫られるのが実際のところだろう。それを自己責任と呼んでいいのかは、わからない。

加熱にのみ参加する ジレンマを胸に抱えて

では、大学はその冷却にどう寄り

添っているのか。入学式において学長が「本学の学生としての誇りを持って」という言葉を発するときは、その最初の機会であろう。また、初年次に施される歴史やミッションに関する自校教育も、冷却機能を果たしているかもしれない。良い友人や優れた教員との出会いを通じ、この大学も悪くはないかもしれない、と徐々になじんでいくというのが、冷却の最も一般的なパターンなのであろうが、近年は大学もそのプロセスに意識的に関わり始めている。

そして、受験生の行く末を気にしているというアドミッションセンターのあなたはどうか、という話になる。毎年、全国各地の進学相談会で多くの受験生に大学の説明をしているが、それを聞いて入学してきた学生が受験モードを解き、「あの説明どおりだった」と学生生活に満足してくれているかどうか、それを確実に知る手段をセンターは単独では持っていない。

まれに、「相談会ではお世話になりました」と訪ねてくる学生はいるものの、彼らは冷却がスムーズにいつているから来てくれるわけで、他の「受験生だった人たち」は、どうやって「うちの大学の学生」になっていつているのだろうか。

気にしながらも冷却に十分には力を傾けられず、一方で加熱には参加している、というジレンマを抱えながら、今年もまた新学期が始まる。人の人生にちょっかいを出しているよなあ、という自戒や自覚を失うと、この仕事はたちまちアウトである。



おおたに・すすむ

1963年北海道生まれ。筑波大学大学院教育学研究科博士課程中退。摂南大学、旭川医科大学などを経て2006年から筑波大学准教授としてアドミッションセンターに勤務。博士(教育学)。専門は中等教育制度史、大学入試制度論、学校設置者論など。年間50件ほどの大学説明会に参加。キャンパス(1周5.3キロ)を走ったり、学生時代に所属していたスキークラブの顧問を務めたりするなど、身体活動をしながら思考するタイプ。